1520号(夕焼け通信 創刊1993.4.23)　2025.12.22
〒690-0871 島根県松江市東奥谷町386-7　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

老い老いに

# 木幡智恵美

63

○○六年の我が家の元旦は例年と違っていた。

まずは二男。私が台所に降りたらすでにテーブルについて、昨夜の残り物で朝食を摂っていた。何を思ったか、年賀状配達のアルバイトをすると言い出したのだ。年末から始め、初日はかなり疲れて帰ったので続くかどうかと心配したが何とか勤め上げ、元日を迎えたのだった。松江市内でもかなり東、自転車で四十五分かかるところの地区を担当しているとのこと。やんちゃ坊主でこれまで散々手を焼いた子だ。それが、世の中皆正月気分で浮かれているのに、自転車で寒い中頑張って出勤するようになったかと思うと、少し頼もしく感じた。

次は長男。東京の予備校の寮に入っての一人暮らし。夏に帰って以来五ヶ月ぶりに見せた姿はぼさぼさの髪に鼻ひげまで生やしている。まずは髪を切ってやった。元日は毎年お参りする氏神様に行って合格祈願。去年は菅原天満宮に詣でたけれども願いは叶わなかった。天神さんに「努力が足りない」と言われたようだ。今年の氏神様は長男をどう判断するだろうか。その夜、一人バスに乗り込む息子の背中を抱きしめたい思いだった。

そして長女。去年までは家族と一緒には詣でなかったのに、年女でもあるからか、愛犬エリーを連れて氏神様に参った。社会人一年生となって、仕事で悩むことばかり。毎年二日には出雲の家を開けに行って一泊するのだが、今年、長男は東京、二男は早朝のアルバイトがあるので長女と二人日帰りで行った。その行き帰りの道中、娘はしゃべりづめだった。だんだんに担当患者が増え、カンファレンスや勉強会などで一緒に食事が出来ない日が多くなっていた。夕食時に家族に吐き出せずにいた溜まりに溜まった話をまくしたてたのだった。

前年に二度目の大病を患った夫。冠状動脈に二本ステントを入れ、ニトログリセリンをいつも持ち歩く生活。酒を減らすこと、喫煙者の多いパチンコ屋にはなるべく行かないようにと言われている夫は、氏神様に無病息災を祈願してから、「じゃ、行ってくるわ」と私たちに踵を向ける。行先は勿論、パの字の付く所。娘も息子も唖然とした顔をしていた。



座付の雑記　27

# 宮森健次

## 印象深い

松江が初任地という若い新聞記者から取材を受けた。話の流れで、彼女が見せてくれたスクラップブックには、自身の記名記事が掲載順に並んでいた。一つ一つ誇らしかったり、悔いたりして貼ったんだろうと察せられた。

夏のゆうれい船やチャリティーライブの記事も書いてくれていた人で、何度かしゃべっているうちに、ぼくがなぜこどもたちに落語をさせているのか興味をもったらしい。インタビューは、十年以上前のそもそもの始まりについてくわしく聞かれた。これまでもそれは聞かれていて、何度か記事になっている。でも、答える度に変わっていることを白状させていただく。その時は、そう思っていたのだから仕方がないのだが、後から考えると、どうしても取材の文脈にひきずられてしまって、記事にするのによさそうな答えをついしゃべってしまっている。自分で語りながら、あとから「本当か？」と自問する。その修正も二度三度となると、だんだんこのあたりが本当かもしれないというあたりに落ち着いてきた。

昨日、その記者から電話があった。いくつか確認をしたあと、

「やっぱり印象深いことといったら、高尾小学校での落語ですか」

と聞いてきた。記者にとって初任地が忘れがたいように、ぼくもこども落語を始めたところだから印象深いのはまちがいない。でも、今の印象の供給元は今の子どもたちだ。

「もちろんそれはありますけどね、今やってることも印象深いです」

「たとえば、どんなことですか？」

問われて続けざまに浮かんできた子どもたち。一人は、この間、転校していく友だちのために「仲良くしてくれてありがとう」を落語会で伝えた子。だれかを喜ばそうと思ったらこんなに力が出るのか、と見ていて圧倒された。その友だち家族は、「一生忘れない」と言ったそうだが、プロとかアマとか、表現力の優劣とか、小さな子であろうとそんな尺度を超えてしまうことがあるのだ。

もう一人、家族の葬儀で落語を披露した子。親族が集まった場で、なんとなく手持ち無沙汰になった時間、「落語やってくれない？」と祖母が言うのに躊躇しつつも結局応じた。

「こんな場でやらせていいのかとドキドキしました」後日祖母はそう言って笑ったが、大いに盛り上がったそうだ。故人の人徳をそんな形で讃えられる家族も、感じ取れる子どもにもまた頭が下がった。

**30代フリーター**　高市政権の高い支持率にもかかわらず、自民党の支持率は伸びていない。

**年金生活者**　政党政治からカリスマ政治への転換を示す兆候に見える。戦前の日本にも同様の転換があった。政党政治が行き詰まり、若い貴族の近衛文麿が国民の人気を集めた。背景には世界恐慌があった。それに対応できない政党に国民の不信が集中した。

　経済危機とは、分け合うパイが縮小することだ。第1次世界大戦後の日本は本土が無傷だったため、輸出が急増し、空前の好景気を迎えた。それで膨らんだパイをどう分け合うかをめぐって、対立しながら調整をはかったのが当時の2大政党の政友会と民政党だった。だが、世界を襲った恐慌でパイが一気に縮小したため、その分け前の争奪と調整を担う役割を奪われ、弱体化していった。

　今の日本は、インフレの進行と実質賃金の低下で国民の分け合うパイは縮小し続けている。それを止め、拡大に転換させる構想と政策をどの政党も持ち合わせていない。それが政党への不信を呼び起こし、戦後の基軸政党であり続けた自民党を少数与党に転落させた。

**30代**　そこに登場したのが高市早苗だ。

**年金**　「初の女性首相」は彼女にカリスマ性を帯びさせた。高市の掲げる「責任ある積極財政」はインフレを加速する政策であるにもかかわらず、国民の期待を集めた。カリスマの輝きが生んだ錯覚だ。近衛は国民の人気を集めたにもかかわらず、パイを増やすどころか、日本を長い戦争へと導いた。高市にそこまでの危険は感じられないが、危うさの構造は近衛と同様だ。

　近衛も高市もナショナリズムが高まる中で政権のトップに就いた。ナショナリズムの高まりは国家の宗教的側面が前景化することを意味し、カリスマ政治家はその司祭の役割を担う。

**30代**　国家の宗教的側面とは？

**年金**　近代国家を構成する「ネーション」と「ステート」のうち、「ネーション」を指す。「ステート」が主権を有する統治機構を指すのに対し、「ネーション」は共通の言語、文化、歴史を有する共同体を指す。ベネディクト・アンダーソンにならって「ネーション」を「想像の共同体」と呼べば、「ステート」は「現実の共同体」と言うことができる。

　「想像の共同体」は、マルクスの考察に従えば、国家が国教のつっかえ棒を棄て、おのれ自身が宗教になったときに完成した。それは市民社会で孤立して生活する人間を想像の中で共同的な存在にする役割を担う。

　他方、「現実の共同体」の主要な役割のひとつは富の再分配にある。市民社会は放っておけば富の偏在が避けられない。持てる者から持たざる者への富の移転を国家は求められる。だが、その富が縮小すれば、再分配も縮小し、国家の根幹の機能は低下する。

　そうした「現実の共同体」の不具合を補うために、「想像の共同体」が膨張し始める。縮小する「現実のパイ」に代わって、「幻想のパイ」を膨らまる。それがナショナリズムの高まりとなってあらわれる。

　政党政治が機能しているときは、政治家にはカリスマ性よりも実務能力が求められる。この場合の実務能力とは、自らが代表する階級、階層のパイの分け前を少しでも増やすことのできる力だ。それはパイが少なすぎては発揮できない。それが続けば信用を失う。

**30代**　そのときカリスマ政治家が彼らに取って代わる。

**年金**　カリスマ政治家は、パイをめぐる国内の対立を国外との対立に転化する。パイの縮小の原因を国外に求め、排外主義を流布させる。軍備の増強を当然視する世論を形成していく。前景化してきた国家の宗教的側面をつかさどる聖職者となったカリスマ政治家にとって、実務能力はかえって邪魔になる。高市の「台湾有事」発言は、外交上の実務能力の低さをあらわにした。

**30代**　政党政治からカリスマ政治への転換の典型はトランプ政権の誕生だ。

**年金**　民主制という同じ俵の上で政権交代を繰り返す根幹のシステムが棄損し始めている。トランプが２０２０年の大統領選で落選したとき、支持者が選挙結果を認めず、連邦議事堂になだれ込んだ事件でそれがあらわになった。

　土俵の同一性、ルールの共有が失われれば、「対立」は消滅し、代わって「分断」が進む。「対立」している間は討議が可能であり、「対立」こそ討議が成り立つ条件でもある。「分断」が深まれば討議は難しくなる。強権の行使が次第にそれに取って代わるようになる。トランプは政敵の訴追、恩赦の乱用、学生・研究者への圧力などを平然と実行している。それができるのも彼がカリスマ性を持っているからだ。

　アメリカに代わって、新たな覇権国家を目指す中国の習近平も、カリスマ政治への転換という世界の流れに乗って、カリスマ的な指導者を目指す。ただし、彼にはそうした指導者に見られる神がかったところが少しもなく、カリスマ的な資質は皆無に近いと言っていい。だが、現在の世界に最も適応できるのはカリスマ的な指導者だと認識しているはずだ。毛沢東の権威をバックに、強権を振るって力を誇示し、人為的に自らをカリスマ指導者に仕立てる演出を続けている。

ニュース日記　997

**中村　礼治**

# 政党政治からカリスマ政治へ